様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０４５７

研究課題名（和文）頻度的観点からの、ドイツ語における「意味と形式の対応関係」分析

研究課題名（英文）A frequency-based analysis of the relations between meaning and form of the German language

研究代表者
在間　進（Zaima, Susumu）

東京外国語大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：３０１１７７０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：ドイツ語の使用の記述という目標のための基礎的研究として、頻度的観点から、「意味」と「形式」の対応関係の、具体的なデータに基づく分析を行った。その結果、唯一可能な意義あるドイツ語研究は、「使用頻度分析を軸とするもの」、別の言葉で言うならば、「ふつうのドイツ語母語話者のふつうのドイツ語」の、実用的応用を想定した分析のみであるとの結論に至った。同時に、データの収集・分析のノウハウを蓄積することもできた。

研究成果の概要（英文）：As a basic investigation for the description of the uses of the German language, we analyzed the relations between meaning and form from the viewpoint of frequency, based on the concrete data. Through this analysis, we have come to the conclusion that the only possible and meaningful German study is a frequency-based one, in other words, an availability-oriented one which analyzes the 'ordinary' language use of 'ordinary' native German speakers. We have also improved the techniques to gather and analyze language data.

研究分野：ドイツ語学

キーワード：ドイツ語　意味と形式　使用頻度　実用的応用

１．研究開始当初の背景

「意味」と「形式（形）」の関係の記述が言語研究の最も重要な課題である。しかし、「意味」は、「形式」を通してしか見ることができず、また、「形式」の、「意味」に対する関係は、人為的な要因（言語習慣、歴史的変遷など）によって複雑化している。そして、さらに言えば、「形式」の容認性そのものも、ドイツ語母語話者の「語感」という極めて主観的なものに依拠する不安定なものである。

「意味」と「形式」の関係に関するこのような事実は、ドイツ語研究においても、根本的な、決して看過できない問題であるはずであるが、この問題とドイツ語研究がこれまで十分に向き合って来たとは言えない。

２．研究の目的

上述したように、「意味」と「形式」の関係は、人為的な要因も深く関わった複雑かつ不安定なものではあるが、他方、ドイツ語がドイツ語母語話者間のコミュニケーション手段として実際上十分な役割を果たし得ていることも事実である。このことは、ドイツ語の使用の根底に、やはり何らかの形で、一定の文法的体系が存在していることを示していると考えられる。私たちは、いくつかの試行的事例分析と考察から、もしドイツ語が、「意味」と「形式」の複雑かつ不安定な対応関係にもかかわらず、なお一定の文法的体系を持つ存在であるとするならば、この文法的体系を、実際の「言語使用」、それも「使用頻度」の観点から研究するのが現実的かつ唯一意義あるドイツ語研究であろうと考えるようになった。

本プロジェクトの目的は、この考えに基づき、ドイツ語の使用実態の全体的記述を最終目標に、コーパス・データを用いて、事例の収集・分析のノウハウも蓄積しながら、「意味」と「形式」の関係を、可能な限り大量のデータで分析する一方、関連する理論言語学やコーパス言語学の研究成果を検証しながら、ドイツ語使用の根底にある文法的体系の記述を軸とする「使用頻度に基づくドイツ語研究」を、方法論的に確立するための基礎研究を行うことである。

３．研究の方法

上記の目的を達成するための方法は、以下の３つである。

(1)「意味」と「形式」の関係に関する実態を可能な限り広く知るために、主に Institut für deutsche Sprache のコーパス DeReKo から事例を収集し、分析を行う（「事例分析」）。なお、分析対象は、本プロジェクトの期間も考慮し、「語句結合」、「語句結合の拡大」、「情報構造的バリエーション」の３点に限定した。

(2) 大量のデータを効率的に整理する方法を確立するために、以下のような従来の手順を、その有効性を検証しつつ、採用する（「分析手順」）：

①まず、動詞との結びつきの強いものほどより文末に置かれるというドイツ語の特徴、非必須的語句が少なくなること、分離動詞の存在などを考慮し、zu 不定詞句の事例を収集・分析し、語句結合の基本的語句を抽出する。

②次に、dass 文の事例を収集・分析し、情報構造上の影響を排除した形での基本的構造を抽出する。

③最後に、情報構造的側面も分析対象に加えるため、主文の事例を収集し、文頭語句も含めた分析を、dass 文での分析結果の検証とともに、行う。

(3)「使用頻度に基づくドイツ語研究」の理論的基礎づけをするために、主に Institut für deutsche Sprache での、ドイツ語の使用頻度分析に関する情報を収集しながら、ベルリン自

由大学の S. Müller 教授などからの情報提供も受け、生成文法での研究成果（特に内在的言語、外在的言語に関する考察）の批判的考察を行う（「理論的考察」）。

４．研究成果

（1）まず、「事例分析」によって得られた主な知見を３点述べる。

一つ目は、使用頻度の相違が表現意図に基づくものなのか、あるいは単なる言語習慣に基づくものなのかを確定する必要があるということである。たとえば、与格・対格支配の前置詞の一般的意味規則（「場所」＝与格、「方向」＝対格）の例外とされる動詞グループ（「出現・消滅」動詞など）の格支配の頻度分析を行ったところ、上記の意味規則に準じる形で、与格と対格の使用頻度が確認できる動詞 aufnehmen「受け入れる」（「入院」か「入会」か）もある一方、意味的相違と無関係に、与格と対格の使用頻度がほぼ同じである動詞 einkehren「立ち寄る」、与格使用が大半である動詞 einschließen「閉じこめる」、与格使用がほぼすべてである動詞 versammeln「集める」もある。

このような使用実態は、「場所」の表現意図と「方向」の表現意図の使用頻度上の相違とも、単なる言語習慣に基づく使用頻度上の相違とも捉えることが可能である。これは、当然、「真か偽か」の問題はなく、「妥当性」の問題である。したがって、意味規則を重視し、前者の立場をとる場合には、それが「規則」とするにふさわしいものであるのかどうか、また、逸脱事例を重視し、後者の立場をとる場合には、そのことによってどのような利点が生じるかなどを十分に幅広く検討し、逸脱度合いなどを考慮した上で、そのどちらにするかを確定することが必要になる。

二つ目は、使用語彙レベルでの分析も必要になるということである。たとえば、dass 文と zu 不定詞句の最大の相違は、主語の表示・非表示であるため、従来、zu 不定詞句の意味上の主語と主文の語句との関係が主な問題になって来た。しかし、言語使用という観点から、そして、特に省略が大幅に可能な日本語の母語話者にとって問題になるのは、主語を表示すべきか否か、すなわち dass 文と zu 不定詞句のどちらを用いるかである。具体的には、dass 文の主語と zu 不定詞句の意味上の主語（両者をまとめて「論理的主語」と呼ぶ）と主文の主語の３者が同一になり、dass 文も zu 不定詞句も基本的に使用可能になる場合である（下例 の a と b）。なお、主文の主語が論理的主語と異なる場合は、dass 文のみが使用可能になる（下例の c）。

a. Gisela behauptet, dass sie ihn noch liebt.
(Gisela = sie)

b. Gisela behauptet, ihn noch zu lieben.

c. Gisela behauptet, dass Anke ihn noch liebt.

このような可能性を持つ動詞（beschließen, versprechen, vorschlagen なども）を分析したところ、dass 文よりも、zu 不定詞句の方が高頻度で用いられるという結果になった。

主文の主語と「論理的主語」が同一かどうかという問題は、使用語彙レベルの、極めて「表層的な」ものであるが、ドイツ語学習上、情報としては有益なものである。ドイツ語の使用実態を実用的に記述しようとするならば、このような「表層的」レベルでの分析も必要になる。

三つ目は、表現される事柄のありようによって文法規則も異なり得るということである。たとえば、受動文形成の表現上の意図の一つは、動作主を「背景化」することで、したがって、受動文での動作主表示（von 前置詞句）は非必須的になり、表示される頻度も低く、そのため、表示される場合は、下例の a と b のように、情報価値の高いレーマあるいはその一部になると言われる。

a. Ich war **von einer Katze** gebissen worden, die ihrerseits von einem Eichhörnchen angesteckt

worden war.

b. Plötzlich wurde er **von einem Schwarm Wespen** angegriffen und gestochen.

しかし、上例の動詞 beißen「かむ」、stechen「刺す」の場合、動作主が表示される事例数は、共に受動文全体の 7 割強になる。そうであるならば、stechen、beißen における受動文形成は、動作主を「背景化」するためでなく、むしろ、動作主をレーマとして「前景化」するためのものであり、また、一般に非必須とされる動作主表示は、限りなく必須性を帯びるとも言えよう。

事柄のありようが文法規則を決めるのであり、表現される事柄が異なれば、文法形式の表現機能も異なってくるのである。

以上、ドイツ語の使用実態の記述にとって有意義と考えられる３つの知見について述べた。これらのことは、ドイツ語の使用実態を把握するためには、一部のサンプル例に基づく分析では不十分であり（データが不十分ならば、当然、その結論も不十分なものになる）、大量のデータを幅広く分析することが必要であるということを示していると言えよう。一部のサンプル例の分析のみによって一般性のある規則性を抽出することが不可能なのが「言語」であり、ドイツ語を全般的に記述するには、ドイツ語全般に渡る個別的分析の積み重ねが不可欠なのである。

（2）次に、「データ分析の手順」について得られた主な知見について述べる。

上掲の「３．研究の方法」の（2）で述べた手順に従い分析を進めると同時に、調査事項の検討なども行い、データ処理のノウハウを蓄積した。①主文と dass 文と zu 不定詞句の事例分析の結果がほぼ同一になる、②zu 不定詞句では非必須的語句の共起が制限されるというような作業仮説も、特に問題なく適用でき、その有用性を実証することができた。ただし、本プロジェクトで分析対象にしたのは、主に他動詞であり、他の動詞、他の品詞、他の文法現象を分析対象にする場合には、それぞれにふさわしい分析手順を考案することが必要になろう。

（3）最後に、「理論的考察」によって得られた主な知見を３点述べる。

一つ目は、ドイツ語研究の分析目標についてである。チョムスキーは、I-言語と E-言語という概念を導入し、前者を「心／脳の中の，言語に関する諸特性」（人類すべてに共通している種としての特徴）、後者を「心／脳の諸特性から独立したもの」（ある言語共同体においてなされ得る発話の総体）と定義し、E-言語は、「単なる人工物」に過ぎないと述べる。したがって、E-言語よりもさらに「外在的」であろうドイツ語の研究で問題にし得るのは、「真か偽か」ということではなく、当該の記述が「どの程度妥当か」ということのみということになる。

ドイツ語研究の中には、無意識的にでも、「真か偽か」を問う形でなされるものが多くあるが、「真か偽か」を問うにしても、その実証は、永遠に不可能であり、「個別言語」としてのドイツ語を分析対象にする場合、決して第一義的な目標になり得ないであろう。なお、生成文法において、脳の中の実在的諸特性が抽出され得たとしても、それは、あくまで「言語」の特性であり、「個別言語」であるドイツ語の特性にはなり得ないことも明らかであろう。

二つ目は、ドイツ語研究の分析対象についてである。生成文法のように、「物理的な」ものを分析目標にし得ないとするならば、ドイツ語研究が何を分析対象にすべきなのか、し得るのかということになる。上述したように、「意味」と「形式」の対応関係は、複雑かつ不安定である。しかし、それを使用頻度という観点から眺めた場合、ドイツ語使用に一定の傾向を見て取ることができる。また、

これも既に述べたことではあるが、「意味」と「形式」の関係が複雑かつ不安定であるにもかかわらず、ドイツ語がドイツ語母語話者間のコミュニケーション手段として「実際上十分に」機能し得ているのである。これらのことを考え合わせるならば、現時点で、ドイツ語研究の分析対象になり得るものは、使用頻度を通して捉え得る、ドイツ語使用の根底にある文法的体系ということになる。これは、いわばドイツ語の現実のありようから必然的に辿り着く結論である。

なお、このような文法的体系は、現実に存在しているものと見なせる一方、ドイツ語母語話者の語感などの変化によっては変わり得るものである。したがって、これを一言で特徴づけるならば、「可変的かつ実在的な存在物」ということになろう。

三つ目は、ドイツ語研究の目的についてである。ドイツ語研究が「分析のための分析」「単なる仮説提示」に終らないためには、研究目的を明確に設定すべきであるとし、その目的として実用的応用を提唱して来た。使用頻度の高い表現は、いわば「ふつうのドイツ人がふつうに使う表現」である。したがって、使用頻度を分析することは、「ふつうのドイツ人がふつうに使うドイツ語」を分析することになる。ドイツ語学習の目的がまずは「ふつうのドイツ人がふつうに使うドイツ語」を学ぶことであるならば、ドイツ語学習への実用的応用という観点からしても、「使用頻度に基づくドイツ語研究」の持つ意義は明らかであろう。

四つ目は、「使用頻度に基づくドイツ語研究」の方法論的特徴についてである。分析対象の「言語使用の根底にある文法的体系」を「可変的かつ実在的な存在物」と特徴づけた。一般的には、「可変的」なものを分析対象にすることはあり得ない。私たちは、「使用頻度に基づくドイツ語研究」の目的として実用的応用ということを掲げている。このような目的設定の場合、分析結果そのものが問題になるのではなく、それが実用的応用という面でどれほどの意義があるかが第一義的に問われる。すなわち、分析結果が部分的に不完全であったとしても、実用的応用の面で、従来の物よりも有用なものであるならば、それはそれとして価値ある分析になるのである。

最後に、本研究の今後の展望について述べる。使用頻度分析の重要性に関する認識は、ドイツでも、確実に広がっており、Web データを使用した「実証研究」も見られるようになったが、使用頻度分析をドイツ語研究の中でどう位置づけるべきか、位置づけ得るかなどの本質的問題に関しては、今なお手探りの状況と言える。本プロジェクトでは、使用頻度分析重視が言語使用の実態から導き出される必然的結果であり、また、ドイツ語研究の実用的応用という観点からしても、価値ある構想であることを明らかにした。

学問の社会的意義がしばしば問われる。ドイツ語研究も、社会的意義を持つものでなければならない。本プロジェクトの成果は、「社会的意義」という理念をドイツ語研究において実現していく上で重要な一歩になるものと考える。

＜参考文献＞

ノーム・チョムスキー、『言語基礎論集』（福井直樹編訳）、2012、196－215

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

①在間進、ドイツ語研究の新たな構想—個別言語研究の実用的応用—、DER KEIM（東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会）、査読有、38 巻、2015、1-16

②S. Zaima / M. Kang, Zur gebrauchs- und

korpusbasierten Analyse der Konstituenten-verbindungen im Deutschen, M. J. Domínguez Vázquez / L. Eichinger (Hrsg.), Valenz im Fokus: Grammatische und lexikographische Studien zu Ehren von Jacqueline Kubczak、査読有、2015、245-260

③山田善久、在間進、ドイツ語辞典における「定義語彙」調査、査読無、日本独文学会研究叢書 098、2014、80-92

④在間進、ドイツ語研究に関する三つの考察—容認性、規則化、使用頻度—、DER KEIM（東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会）、査読有、35 巻、2012、1-11

⑤阿部一哉／在間進、句例コーパスの構築と諸問題、跡見学園女子大学文学部紀要、査読有、48 巻、2013、95-104

⑥成田節、翻訳と語り手の視点、査読無、日本独文学会研究叢書 085、2012、22-39

⑦T. Narita, Ausdrücke benefaktiver Bedeutung -- ein deutsch-japanischer Kontrast、査読有、R. Maeda (Hrsg.): Transkulturalität. Identitäten in neuem Licht, Asiatische Germanistentagung in Kanazawa 2008、2012、154-160

〔学会発表〕（計７件）

①在間進、佐藤宙洋、ドイツ語研究で今、問われるべき三つの問題点、富山大学人文学部シンポジウム『ドイツ語教育のためのドイツ語研究』、2015 年 2 月 20 日、富山大学

②成田節、ドイツ語の受動文について—用例分析の観点、富山大学人文学部シンポジウム『ドイツ語教育のためのドイツ語研究』、2015 年 2 月 20 日、富山大学

③在間進、ドイツ語研究の構想的視点—個別言語研究の実用的応用を求めて、2014 年度日本独文学会秋季研究発表会、2014 年 5 月 25 日、麗澤大学

④在間進、ドイツ語辞典における「定義語彙」調査、2013 年度日本独文学会春季研究発表会、2013 年 5 月 26 日、東京外国語大学

⑤S. ZAIMA／M. KANG, Überlegungen zur morpho-syntakto-semantischen Analyse der Konstituentenverbindungen von deutschen Verben、第 40 回語学ゼミナール、2012 年 8 月 29 日、IPC 生産性国際交流センター

⑥阿部一哉／在間進、「句例パラレルコーパス」構築とその諸問題、2012 年度日本独文学会秋季研究発表会、2012 年 10 月 13 日、中央大学

⑦成田節、コーパスとドイツ語研究・ドイツ語教育、2013 年「語料庫與外語教學研究」國際研討會、2013 年 3 月 17 日、東呉大學（台北）外國語文學院

６．研究組織

(1)研究代表者

在間　進（ZAIMA SUSUMU）

東京外国語大学・名誉教授

研究者番号：30117709

(2)研究分担者

成田　節（NARITA TAKASHI）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：50180542